

# ISICO PRESS

P.02 巻頭特集

## 人材の採用力強化と定着率向上へ 中小企業の事例にヒントを探る

野々市運輸機工(株)／(株)甘納豆かわむら

P.06 サキドリ

小松マテーレ(株)

P.08 One Step

(同)CとH／升井彩 本乾漆

P.10 イシコのトリセツ

いしかわアクセラレータープログラム

P.12 INFORMATION

[ 石川県からのお知らせ ]

アートレンタルいしかわ

甘納豆かわむら(金沢市)の接客の様子。働きやすい職場づくりが採用力と定着率のアップにつながっている。詳しくは巻頭特集をご覧ください。

【表紙撮影／黒川博司】

# 人材の採用力強化と 定着率向上へ

## 中小企業の事例にヒントを探る

少子高齢化によって労働力人口が減少する中、人手不足や離職率の高さに頭を悩ませている中小企業は少なくない。企業の成長や新たな事業展開を支える人材の確保は、重要な経営課題の一つと言えるだろう。そこで今回の特集では、人材難を解消するために積極的な取り組みを進め、採用力の強化や定着率アップにつなげた2社の事例を紹介する。



## CASE 01



## 職場の雰囲気伝える ショート動画が応募の呼び水に

写真左)「若い人材を採用しなければ組織が活性化していかない」と採用活動に力を入れる吉田社長。

写真右)菓子をつまみながら休憩時間に談笑する野々市運輸機工の社員。社内のコミュニケーションは良好だ。

### 野々市運輸機工(株)

金沢市湊1丁目55番地23  
TEL. 076-238-7077

■代表者  
■創業  
■資本金  
■従業員数

吉田 章  
1966年1月  
1,000万円  
51名

■事業内容  
一般貨物自動車運送事業



ホームページ

### ここ2年で9人が入社 ミスマッチも減る

鋼材など長尺物や重量物のトラック運送を手がける野々市運輸機工では今年4月に新卒社員1人を迎えたほか、これと前後して4人の20代社員が入社した。昨年も30歳前後の社員が4人入った。

人手不足が慢性化する業界にあって、同社の採用の呼び水となっているのがTikTokやYouTube、Instagramで発信するショート動画だ。ドライバーへのインタビューをはじめ、トラックの日常点検のポイント、必要な資格など仕事に関わる内容はもちろん、ゲームやクイズ、「踊ってみた」といった柔らかないものまで、ここ2年間で100本を超える動画を投稿している。

ハローワークや求人検索エンジンに掲出する求人票でもショート動画について紹介し、応募者の多くがこれをきっかけに会社に興味を持ち、応募してくるという。

「動画を出し始めて求人の応募者数が増え、年齢層も若くなった。会社の雰囲気を理解した上で入社してくれるのでミスマッチが少なく、離職率は5%以下になっている」。そう話すのは吉田章社長で、自身もたびたび動画に登場し、時にはいじられ役として視聴者の笑いを誘っている。

## 撮影も編集も スマホ1台で完結

同社がショート動画による情報発信に力を入れるようになったきっかけは、就活生向けの合同企業説明会に参加した際、有名企業のブースだけに人が集まる現実に直面したことだった。では、どうすれば若者に会社の存在を認知してもらえるのか。そう考える中でたどり着いたのが、若者が好んで見るショート動画だった。

「文章や写真に比べて、動画は伝わる情報量が多い。スマートフォンが1台あれば、撮影から編集、アップロードまでを完結することができて、費用がかからないのもメリット」と感じた吉田社長は、まずは数多く視聴されている動画をまねることからスタート。現在は2人の社員が企画、撮影、編集に関わり、1週間に2本のペースで投稿している。

ちなみにこれまで投稿した中で最も再生回数が多いのが「お菓子コーナーを作ってみた」という動画でTikTokでの再生回数は50万回を超えた。取引先や社員の家族などからも反響があり、ショート動画の拡散力を実感している。

「人手不足と言われるが、足りないのは企業側の伝える努力。まだまだやれることはたくさんある」と吉田社長は力を込める。

## 殺伐とした職場から 10年かけて改革

求職者が企業を選ぶ際、労働条件だけでなく、職場の雰囲気や人間関係の良さも大きな判断材料となる。その点、同社のショート動画からは、出演する社員の笑顔などを通じて楽しく、活気に満ちた職場の様子が伝わり、求職者を引きつけている。

これがうわべだけのものならば、一旦入社したとしても長続きはしないだろうが、同社では約10年前か

ら組織風土改革に取り組んでおり、その成果がしっかりと根付いている。

改革の契機となったのは、吉田社長（当時は専務）がベテラン社員から「このままだと皆辞めていくぞ」と言われたことだった。当時の野々市運輸機工は労働環境が悪く、社内でのいざこざが絶えなかった。危機感を覚えた吉田社長は社員との対話を徹底し、不満や意見に真摯に耳を傾け、改革に取り組んできた。

経営理念の策定、業務のデジタル化推進、「ありがとうカード」の運用、休憩室のリフォーム、休日の増加、資格取得支援制度の導入、社内行事の開催など、多岐にわたる改革を進め、現在のように風通しがよく、協調性のある社風を築いてきた。

## よりよい職場づくりへ 社員との対話を重視

吉田社長が組織風土改革に向け、最も重視するのは社員との対話である。その際に心がけているのは、一人一人の良い面に焦点を当てることだ。また何か問題があったときに社員を責めるのではなく、指示の出し方などに原因がなかったか検証することで、より建設的で前向きな対話を可能としている。

社員の声をヒントに近年取り入れたのがジョブローテーションの仕組みだ。「人は自分ばかりが苦勞していると思いがち。それならば、一度入れ替えてみればよいのではと考え、制度化した」（吉田社長）。研修や配車の手間は増えたが、導入後は不満の声が減ったほか、相互理解が深まりチームワークもよくなった。仕事の属人化が解消したことで、介護や子育てのための休暇取得も容易になった。

これからは健康経営に力を入れようとISICOの専門家派遣制度を利用し、健康指導や動画による啓蒙活動にも取り組み始めた。

「畑に例えると一番重要なのは土づくり。会社で言えば、それが組織の風土や人間関係であり、これらが整っていないとどれだけ求人募集をしてもうまくいかない。また、組織改革は一度成果が上がってもダイエットで言うリバウンドがあるため、継続的な取り組みが重要」と話す吉田社長。これからもよりよい職場づくりに注力し、採用・定着につなげる考えだ。

スマホを使った動画の撮影風景。企画から撮影、編集、アップロードまで、すべて自社でこなしている。



# CASE 02



## 小売業の職場環境改善を推進 8人の採用枠に全国から応募が殺到

### (株) 甘納豆かわむら

金沢市野町2-24-7  
TEL.076-282-7000

|       |                |       |                  |
|-------|----------------|-------|------------------|
| ■代表者  | 河村 洋一          | ■事業内容 | 甘納豆やようかんなどの製造・販売 |
| ■設立   | 2001年3月        |       |                  |
| ■資本金  | 300万円          |       |                  |
| ■従業員数 | 24名<br>(パート含む) |       |                  |



ホームページ

写真左)河村社長(右から2人目)と甘納豆かわむらの社員。社員はすべて女性で、毎年2人ほどが産休・育休を取得している。

写真右)甘納豆は素材本来の味を生かし、漂白剤・着色料・保存料を一切使用せずに作られている。

### 残業は月10時間まで 年末年始は休業

金沢市のにし茶屋街に店を構える甘納豆かわむらも採用がうまくいっている企業の一つだ。コロナ禍が明け、経済活動が正常化した2023年には8人の採用枠に全国から応募が殺到し、店長経験者など求めている人材を採用できた。

小売業では長時間労働や休日の取りづらさが人手不足の深刻化に拍車をかけていると言われるが、同社が求職者から選ばれるのはこうした課題の解決に積極的に取り組んできたからだ。

例えば、残業削減に向けて心がけているのが年間の業務量の平準化だ。特定の季節だけに売れるような菓子は作らず、繁忙期にはECサイトや電話からの発注分の納期を長く設定する。その結果、残業は月10時間までに抑えられている。

連続勤務日数は基本的に4日まで。有給休暇の申請はスマートフォンの勤怠管理アプリを使って気軽に申請できるようになっている。家族とゆっくり過

ごせるようにと毎年12月31日から1月3日は休みとしている。百貨店などへの卸売りをしないのも、取引先の都合よりも自社の健全な労働環境を優先したいと考えているからだ。「しっかり休みを取れなければ家庭も成り立たない。スタッフは喜んでくれていて離職も減った」と河村洋一社長は話す。

### 楽しく仕事ができ 皆が幸せになる経営を

河村社長が働きやすい職場づくりを追及する原点は、かつて働いていた親族の会社での経験だ。その会社では経営陣と社員の対立が激しく、互いに相手の非を責め合うような状況だった。

「今の時代、労使ともに求めているのは心の豊かさ。楽しく仕事ができ皆が幸せになり、お客様にしっかりと喜んでもらえるような会社でなければ、経営する意味がない。自分がやるならば、そんな経営にチャレンジしたいと思った」と河村社長は振り返る。

また、採用が思うようにいかなかった時代に、自社

よりも時給の低い大手コーヒーチェーン店に多くの人材が集まっているのを見て、悔しさを感じたことも改善への原動力となった。

河村社長は人が集まらないのは会社に魅力がないからだと考え、社員が感じている困りごとを日々のコミュニケーションから一つ一つ丁寧にすくい上げ、先に述べたような制度を作り上げていった。「労務に関することは辛抱させないようにしたかった」と河村社長は話す。

もちろん、休みを増やせば、その分の商機は失われる。そのため、会社をブランド化して付加価値を上げる、あるいは卸売りをせずに自社販売に徹するなど、利益率を高める努力も怠らない。

## 人材が輝ける場の提供へ 新ビジネスを展開

たとえ人材が不足していないとしても、年に3回か4回、自社サイトや民間の転職サイトを通じて断続的に求人募集する点もポイントと言えるだろう。「不足してから慌てて募集をしても、こちらが求めている人

材が応募してきてくれるとは限らない。不本意な採用をしなくても済むよう、困る前に募集をかけて、いい人材がいれば採用するようにしている」と話す河村社長。実際、ブライダル業界の接客コンテストで日本一になった経験を持つ女性など、思いがけない分野からの人材の獲得につながっている。

獲得した人材を起点に新たな事業展開にも取り組んでいる。現在、同社では金沢市泉2丁目にある登録有形文化財で江戸時代に建てられた「北中家住宅」を改修しており、1年後をめどに、カフェと豆を使った焼き菓子作りを体験できるスペースをオープンさせる計画だ。インバウンドを含めた観光客の集客が狙いで、有名洋菓子店での実務経験を持つ社員の能力を生かす場を作ろうとの考えが、事業化のきっかけとなった。

採用を見据えた職場環境づくりに向けたアドバイスを聞くと、「社会保険労務士の進言はすべて受け入れることが大事。また、利益を出そうという考えを前提から外し、柔軟に労務を考えることが重要」と話してくれた河村社長。採用力強化と定着率アップに向け、同社の取り組みがよいヒントになりそうだ。

### Message

## 労務管理のスタンダードを知り 社内の問題に向き合い対策を

今回紹介した2社の例からも明らかのように、採用の課題は定着の課題であり、つまり雰囲気がよく働きやすい職場づくりこそが大切なのです。そのような職場環境なら、コミュニケーションは活発で、モチベーションは向上し、社員一人ひとりがのびのびと力を発揮します。そこから優秀な人材が育ち、新事業や新商品の開発へつながり、そのエネルギーこそが採用活動へと波及していきます。

今後、職場環境を整えるにあたり、経営者にまずやってほしいことは労務管理の基本を知ることです。その上で、社内で起きる一つ一つの課題に真摯に向き合い、改善していくようにしてください。この時、自分自身の思いや考えに引っ張られないように注意が

必要です。あくまでも目の前で起きていることが現実ですので、現場の社員にしっかり聞いて、一緒に解決していきましょう。職場の雰囲気は短期間で変わるものではありません。性急に結果を求めずに中長期的視点で取り組むことが重要です。

情報発信する際は、飾り立てるのではなく、会社のありのままの姿を伝えることが大切です。よく見せて採用につながったとしても入社後にギャップを感じれば、今の時代はすぐに退職してしまいます。会社が不利益情報だと思ったことも正直に伝えることで逆に求職者から信用を得たりします。このように、求職者優位の時代、日々の企業活動の中で採用常識をアップデートしてください。



ISICO人材アドバイザー  
矢部 敏明

#### ■お問い合わせ

ISICO総務企画部企画広報課

TEL. 076-267-1239

E-mail: jinzai@isico.or.jp

SAKIDORI  
サキドリ

炭素繊維が生み出す  
軽くて意匠性も高い  
しなやかな耐震補強材



写真左) 本社敷地内にあるファブリック・ラボラトリー fa-boの外観。  
写真右) 中山大輔社長(写真中央)と開発を担当した細川さん(同左)、瀧能さん(同右)。

小松マテーレがISICOの次世代ファンドの支援を受けて開発した「カボコーマ・ストランドロッド」。炭素繊維を用いた強くて軽く、さびにくい耐震補強材だ。デザイン性も高く、広く導入が期待されている。

### 隈研吾氏が設計 白いワイヤで覆われた建物

繊維を中心に、さまざまな化学素材を生産する小松マテーレ。その本社や工場が建ち並ぶ能美市の敷地を訪れると、ひときわ目を引く建物がある。屋上から周囲の地面へ放射状に、建物全体を包み込む格好で約1,000本の白いワイヤがのびているのだ。正体は、炭素繊維で作った耐震補強材「カボコーマ・ストランドロッド」である。

同社は1968年に建てた旧本社棟を耐震補強する際、世界的建築家・隈研吾氏にカボコーマ・ストランドロッドを取り入れた設計を依頼。隈氏は、しなやかな質感を生かし、建物を布で覆っているように見えるデザインに仕上げた。

建物内部にも随所にカボコーマ・ストランドロッドを張り巡らせて、耐震性と意匠性を両立させた。2015年、装いを新たにした旧本社棟は「ファブリック・ラボラトリー fa-bo(ファープボ)」と名付けられ、同社の歴史や最先端技術を紹介する施設として一般公開されている(要予約)。

### 組みひもの技術を用いて 弱点を補強

カボコーマ・ストランドロッドは、同等の強度を持つ金属製ワイヤと比べて、約5分の1の重量しかない。「軽いので、古い建造物にも負荷をかけることなく耐震補強ができる」と同社新規事業開発部の瀧能功介さんが語るように、清水寺(京都府)や富岡製糸場(群馬県)などの歴史的建

## 小松マテーレ(株)

能美市浜町ヌ167番地  
TEL.0761-55-1111

代表者 中山 大輔  
設立 1943年10月  
資本金 46億8042万円  
従業員数 単体811名、連結1,117名

事業内容 高付加価値テキスタイル(生地)の企画開発、製造、販売、営業および新素材の製品企画、デザインなど



関連サイト



写真左)カボコーマ・ストランドロッドは中心の炭素繊維をガラス繊維の組みひもが覆っている。  
写真右)160メートルのカボコーマ・ストランドロッドも写真のように片手で持ち運べる軽さ。

造物で実際に採用されている。

本格的な開発は2010年にスタートした。当時は強くて軽く、さびにくい炭素繊維に注目が集まっていた時期で、さまざまな化学素材メーカーが研究を進めていた。自動車や航空機への活用を目指す大手企業との競争を避け、独自製品を生み出そうと同社がたどり着いたのが耐震補強材だった。

開発にあたり課題となったのが、引っ張る力に強い一方、垂直方向に加えられる力に弱い炭素繊維の特性だ。折れやすいという弱点を補うため同社では、炭素繊維の周囲をガラス繊維で覆う方法を選んだ。

カボコーマ・ストランドロッドの表面をよく見ると、細いガラス繊維が組み込まれている様子が分かる。繊維の束をいくつも交差させながら組み上げていく「組みひも」という日本の伝統技術が用いられているのだ。

組みひもの導入によって、強度を増しながら、しなやかさも併せ持つ仕上がりとなった。この工程は、ガラス繊維の組みひも技術に強い七尾市の谷口製紐が担っている。

さらに、ガラス繊維で覆ったことで、炭素繊維単体では困難だった着色も可能となり、鉄骨や金属製ワイヤといった既存の耐震補強材と比べ、デザインの自由度も高まった。

## 実績づくりとJIS制定が 販路拡大を後押し

2013年に完成したカボコーマ・ストランドロッドは自信作だったが、すぐには市場に受け入れられなかった。「耐震補強材は何よりも安全性が求められる。そして、市場が重視していたのはデータよりも実績だった」と新規事業開発部の細川穂奈

美さんは振り返る。

そこで同社では実績づくりとして、冒頭で紹介したファーボの改築に取り組み、完成するとマスメディアに大きく報道されて注目が集まった。また、ファーボの構造設計を担った設計事務所が、同時期に進めていた善光寺経蔵(長野県)の耐震補強にカボコーマ・ストランドロッドを取り入れた。

この二つの実績に加え、2019年に「JIS A 5571-炭素繊維複合材料より線」としてJIS規格が制定されたことも後押しとなり、導入先は徐々に増えている。

## 製品の普及は 被災地企業の責任

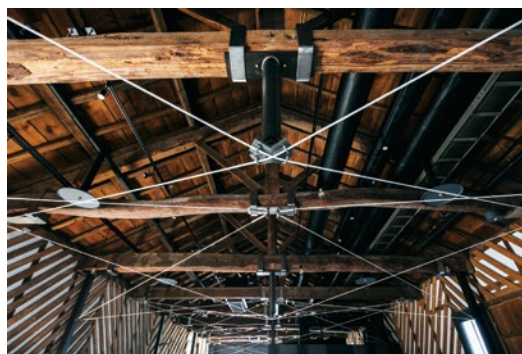
拡販に向けては課題もある。炭素繊維は金属製ワイヤと比較して価格が高く、導入をためらう設計事務所や建築会社がまだまだ多い。瀧能さんは「確かに割高だが、鉄骨などの耐震補強材と比べて軽いので足場が簡易で済み、コストが抑えられる。トータルでの導入メリットをアピールしていきたい」と力を込める。

工場で耐震補強工事をする際、従来であれば長期間生産を中止し、大がかりな足場を組む必要があったが、カボコーマ・ストランドロッドなら工場を稼働させたまま施工できるといった利点もある。

木造家屋への活用も検討している。ただ、カボコーマ・ストランドロッドはまだ耐震改修の補助制度の対象になっておらず、今後、第三者認証の取得を目指す。

能登半島の中央部に位置する七尾市出身の細川さんは「能登半島地震で発生したような家屋の倒壊を少しでも減らすためにも、被災地の企業としてさまざまな課題を乗り越え、カボコーマ・ストランドロッドの普及を一層、進めていきたい」と展望を語る。

旧富岡倉庫3号倉庫(群馬県)での導入例。天井にカボコーマ・ストランドロッドを行き渡らせている。



©Kawasumi・Kobayashi Kenji Photograph Office

令和6年能登半島地震で被災しながらも、試練を乗り越え、明日への一歩を踏み出した地元企業の奮闘ぶりを紹介します。

## 震災から半年を経て 珠洲に新拠点。 人と企業をつなぎ 復興の力に

### 合同会社CとH

珠洲市飯田町15-20-1  
TEL.080-5031-6784

代 表 者 伊藤 紗恵  
設 立 2023年6月  
資 本 金 100万円  
従 業 員 数 2名  
事 業 内 容 コワーキングスペース  
兼ビジネス交流拠点の  
運営など



ホームページ



奥能登の地域課題解決に取り組む伊藤さん(写真左)と橋本さん。



珠洲市中心部にある新拠点と活動のコアメンバー。



6月から稼働した新拠点の内観。

### 移住女性と地元男性が創業

「CとH」は6月、珠洲市中心部でかつて保険会社の営業所として使われていた建物を活用し、24時間年中無休のコワーキングスペース兼ビジネス交流拠点「OKNO to Bridge (奥能登ブリッジ)」を再開した。もともとはすぐ近くの別の建物で運営していたが、今年1月の能登半島地震によって全壊したため、金沢に拠点を移し、奥能登と行き来しながら活動していた。新たな拠点は184平方メートルの広さがあり、復興に関わる地域内外の人々が集い、多目的に使えるスペースを確保した。

同社を立ち上げたのは、東京都出身で昨年5月に母の故郷である珠洲市に移住した伊藤紗恵さんと珠洲市出身で今年1月まで能登町の宿泊施設で支配人を務めていた橋本勝太さんだ。地元の人材はもちろん、伊藤さんのネットワークを活用して首都圏から大手企業に勤める人材を呼び込み、地域の課題を解

決する新たなビジネスや雇用を創出しようと活動を続けてきた。

2人の取り組みはISICOが主催する「スタートアップビジネスプランコンテストいしかわ2023」の地域活性化賞を受賞。被災後は、知人の協力を得て、金沢市や富山県高岡市にも活動拠点を広げ、珠洲を中心に地域間連携を強化する。

### 住みたくなる町づくりを

現在進めている取り組みの一つが、地元の女性のテレワークスキルの育成だ。首都圏や関西の企業に連携を呼び掛け、オンラインでできる仕事も提供する。また、東日本大震災の復興に携わるキーパーソンとつながりを得て、耐熱ガラスメーカー・HARIO(東京)が手がけるアクセサリを東北に続き、能登で製作する準備も進めている。「地元で働く選択肢を増やすことができれば、能登に残る・戻る・関わり続けるという可能性生まれる。女性や若者が住みたくなる町をつくりたい」と伊藤さんは狙いを話す。

大学のない能登に若者を呼び込むため、今夏は地域での交流イベントの企画運営などを体験できるインターンシップを実施。5人の定員があっという間に埋まった。首都圏などからの企業研修を受け入れようと、プログラムの設計にも着手する。橋本さんは「日本は人口減少期に入って、従来型のビジネスモデルが通用しなくなっている。人口の少ない地域でいかに関係人口を増やし、ビジネスを作るか。ここからワクワクする未来をつくっていきたい」と話し、都市部と奥能登のリソースを掛け合わせた事業開発も視野に、意欲を燃やす。

## みなし仮設住宅で 仕事を再開。 漆を使った アクセサリーが人気

ますいさい ほんかんしつ  
**升井彩 本乾漆**

輪島市マリントウン  
TEL.090-3290-1787

代 表 者 升井 克宗  
創 業 1967年  
従 業 員 数 1名  
事 業 内 容 漆塗りアクセサリー  
の製造、販売



ホームページ

### 自宅兼作業場が地震で全壊

「升井彩 本乾漆」の店主である升井克宗さんは分業制の輪島塗のうち、磨き上げの工程となる「呂色<sup>ろいろ</sup>」を手がける職人だ。2000年代に自社ブランド商品の製造に乗り出し、今ではこれ一本で身を立てる。主力は、黒檀の玉や貝でできた真珠核に天然の漆を塗って乾燥させ、手のひらや指で磨き上げて美しい光沢を出した「うるし珠<sup>だま</sup>」を使ったピアスやイヤリング、ネックレス、念珠だ。

年初の能登半島地震では輪島市の中心部にあった木造2階建ての自宅兼作業場の1階部分が押しつぶされ、倒壊した。当時、1階でくつろいでいた升井さん夫妻はこたつの下に潜り、揺れが収まった後、頭上に見えたわずかなすきまを目指して脱出した。

県外にある娘夫婦の家や地元の避難所を転々とした後、2月から約3カ月間は、2次避難所となっている加賀市のホテルで過ごした。一時は輪島を離れることも考えたが、「戻って仕事することが復興の足しになる」と5月からは輪島市マリントウンにあるみなし仮設住宅のアパートに住み、3室あるうちの1室を上塗り専用にしたほか、研磨作業用に「輪島工房長屋」の1室を借り、本格的に仕事を再開した。

### 展示会通じ 県外の販路を開拓

以前は輪島朝市や金沢の土産店などへ卸販売していたが、販路開拓のため、ISICOの支援を受け、2022年度から東京や京都で開催される「インターナショナル・ギフト・ショー」に出展している。「展示会でのお客様を待



漆の新たな可能性に挑む升井さんと妻の佳美さん。

つときの立ち位置や声のかけ方など、プロの方からのアドバイスが参考になった」と升井さん。続けて出展するうちに口コミで評判が広がり、今では新規取引先は10軒以上になった。

また、ISICOの成長戦略ファンドや伝統産業市場変化対応支援事業を活用し、商品のブラッシュアップにも励んだ。「地の粉(※)」を使って、くすみがかかったニュアンスカラーを表現したうるし珠は好評だ。事業を通じ、適正な利益を確保できる価格設定やブランディングの重要性も学び、実践している。

升井さんは「ISICOのおかげで先は明るい。輪島にじっとしているのではなく、県外の販路をどんどん広げていきたい。ピンチはチャンス。応援してくれる人も多いので、頑張ってチャンスをものにしたい」と前を向く。

(※) 輪島塗の下地づくりに使われる珪藻土の粉末



流行のニュアンスカラーで仕上げたピアス。



上塗り作業ではほこりが付かないよう細心の注意を払う。



## いしかわアクセラレータープログラム

# 石川ゆかりのメンターが伴走支援 スタートアップの成長を加速

ISICOでは、シーズの発掘段階から立ち上げ期、事業の拡大期に至るまで、スタートアップの成長段階に応じて、切れ目のない支援を実施しています。2022年度にスタートした「いしかわアクセラレータープログラム」もその一つで、石川県ゆかりの先輩起業家による助言、指導といった伴走支援を通じてスタートアップの成長を加速させています。

## 事業ステージに 合わせたスキルを習得

いしかわアクセラレータープログラムは、将来的に株式上場を目指すなど、高い成長意欲を持つスタートアップを対象とした半年間のプログラムです。立ち上げから間もなく、実績もないため銀行から融資を受けられないなど、スタートアップ特有の課題を解決するための支援を提供しています。

参加者は経験豊富なメンターとの対話を通じて、事業計画のブラッシュアップや組織づくりなど、成長に必要な知識やスキルを習得できます。メンターは石川県出身で上場経験を持つ起業家やベンチャーキャピタリストが務めます。月に数回、オンラインまたは対面で、課題の解決に向けた具体的なアドバイスを提供します。

「メンターは普段、首都圏で活躍しているが、自身の知見を地元に戻元しようと、高いモチベーションを持っている。起業家からもメンターが同郷なので、安心して相談できるとの声が寄せられている」とISICOの担当者は話します。

## 過去2年で6社が参加 1億円の資金調達も

このほか、各分野の専門家を招いて資本政策や知財戦略などに関する勉強会を開催し、経営課題の解決に必要な知識を学ぶ機会を提供しています。必要に応じて、石川ゆかりの企業や専門家、投資家、金融機関、大学などのマッチングも支援します。

プログラムの最後には成果発表の場として「デモデイ」を開催。資金調達や提携先獲得の機会にもなっています。

過去2年で6社がプログラムに参加し、1億円の資金調達に成功し、事業の拡大に弾みが付くなど、着々と成果を挙げています。

今年度のプログラムへの応募締め切りは8月9日です。ISICOの担当者は「成長意欲の高いスタートアップを全力で応援する。社会の課題解決につながる事業を展開し、急速に成長したいと考えている経営者は、ぜひ相談してほしい」と呼び掛けています。

【お問い合わせ】

ISICO成長プロジェクト推進部 スタートアップ支援課 TEL.076-267-6291



プログラムの半年間の成果を発表する「デモデイ」。



発表後には集まった投資家らと名刺交換をしました。



プログラムに参加したスパインクロニクルジャパンの米澤社長(写真左)と事業を運営するHEDの高田社長。



米澤社長が開発する脊椎固定用インプラント(写真上)とバルーンカテーテルの試作品。

*Users Voice*

## 勤務医から経営者への転身を後押し 脊椎手術のリスク軽減へ機器開発

2023年度の「いしかわアクセラレータープログラム」に参加したスパインクロニクルジャパンの米澤則隆社長と、スタートアップ支援の実績が豊富で、同プログラムの委託事業者であるHED(金沢市)の高田諭社長に、これまでの成果などを聞きました。

### 疑問や悩みに 的確なフィードバック

スパインクロニクルジャパンは、骨粗しょう症性椎体骨折や腰部脊柱管狭窄症の患者を治療するための脊椎固定用インプラントと手術機器の実用化を目指すスタートアップです。現在、使われている機器は欧米製で、日本人の高齢者に合わないため、術後にインプラントが緩むなどの不具合が発生したり、合併症を引き起こしたりするケースが数多くあります。整形外科医の米澤社長は、こうした課題を解決するためにキャリアを中断し、会社を立ち上げました。

「勤務医だったので経営に関する知識がなく、不安を感じていたためISICOに相談したところ、いしかわアクセラレータープログラムを紹介され参加した」と話す米澤社長。金沢市出身でリード・キャピタル・マネージメント(東京)の谷本徹社長から半年間、指導を受けました。米澤社長は「事業計画書の作成、資金調達にあたって中心的な役割を担うリードインベスターとの関係構築、資本政策の考え方など、多くのことを学んだ。疑問や悩みについての的確なフィードバックが得られ、とても助かった」と振り返ります。ベンチャーキャピタルから2,300万円の資金調達にも成功しました。コーディネーターを務めた高田社長は「米澤社長は医師であり、最初は投資家の行動原理や求めているものを翻訳しながら伝える必要もあったが、今では経営者として大きく成長した」と評価します。

### 臨床試験を経て 2027年に実用化へ

スパインクロニクルジャパンでは量産を見据えた生産体制の構築にめどを付け、正式な医療機器メーカーとしての承認も取得しました。来年からはいよいよ臨床試験を開始する予定です。臨床試験では新たに7億円の資金が必要になりますが、その調達にもプログラムを通して得たノウハウやネットワークが役立つに違いありません。

米澤社長は「本当に多くの人に応援してもらっているの、後は結果を出すだけ。背骨の手術は年間10万件ほどあり、この市場を狙って遅くても2027年にはリリースしたい」と力を込めます。

一方、高田社長は「米澤社長をはじめプログラムの卒業生がさらに成長し、スタートアップを志す若手をサポートする側に回れば県経済にとってプラスになる」と将来を見据え、「プログラムを進化させていくためにも、幅広い企業に参加してほしい。現状にもどかしさを感じている、あるいは最近刺激がないと感じている経営者はぜひ応募を」と話しています。

### (株)スパインクロニクルジャパン

金沢市堀川新町5-1 アリマビル3F  
TEL. 090-5683-5455



ホームページ

■代表者 米澤 則隆  
■設立 2022年9月  
■資本金 1,325万円  
■従業員数 2名  
■事業内容 整形外科医療機器の研究・開発

石川県からのお知らせ

石川県では、障がいのあるアーティストが制作したアート作品の複製画を官公庁や団体、企業等へ有料でレンタルするサービス「アートレンタルいしかわ」を2023年12月から開始しました。今回は事業内容等について紹介します。このサービスを利用して、手軽に障がい者アートを楽しんでみませんか。

**ARI** とびでた個性、届けます。  
**ART RENTAL ISHIKAWA**

アートレンタルいしかわ

オフィスや店舗に個性豊かなアートを届け、  
障がいのある人と社会をつなぐ

「アートレンタルいしかわ」は、オフィスや店舗に個性豊かなアート作品を飾ることで、空間を彩るだけでなく、障がいのある人と社会との架け橋をつくることを目的としています。

現在、49人のアーティストが描いた58作品が登録され、1作品あたり月額4,000円で貸し出しています。レンタルする際は、専門のアートアドバイザーが作品選びや最適な展示場所について助言してくれます。

アーティストには1作品につき月額1,000円が報酬として支払われ、障がいのある人の経済的な自立や社会参加を支援するほか、創作意欲の向上にもつながっています。

サービス開始以降、建設会社や保険会社などが利用しており、アートレンタルいしかわ事務局の山本誠さんによれば、「業

務の合間に作品を見るとリラックスできる」「色彩の鮮やかさに驚いた」といった感想が寄せられています。

事業の実施主体である県障害保健福祉課の原泰知郎さんは、この取り組みを通じて「県民に障がいへの理解を深めてもらい、共生社会の実現につなげていければ」と利用を呼び掛けています。

● お問い合わせ・お申し込み

**アートレンタルいしかわ事務局**

(運営団体:社会福祉法人 松原愛育会)  
金沢市上中町イ67番2 石川療育センター内  
TEL.076-229-1822



ホームページ

【 作品紹介 】



「鬼の島」吉本 鼓涼  
金沢大学人間社会学域学校教育学類附属  
特別支援学校(金沢市)



「見附島沖浪裏」  
谷口 輝弥 (能登町)



「地球の楽器と宇宙が奏でる音色」  
辻 観誠 (小松市)



「無題」根塚 善子  
愛育学園(金沢市)



「カニ」亀田 和宏  
はぎの郷(津幡町)



「僕の犬たち」宮田 卓弥  
一步(能美市)



公益財団法人

**石川県**

**産業創出支援機構 ISICO**

Ishikawa Sunrise Industries Creation Organization

お問い合わせ

TEL. 076-267-1001

FAX. 076-268-4911

MAIL. info@isico.or.jp

〒920-8203 石川県金沢市鞍月2丁目20番地

石川県地場産業振興センター新館

<https://www.isico.or.jp/>



本文には見やすいユニバーサルデザインフォントを使用しています。